慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シェリング『芸術哲学』における神話論について
Sub Title	Über Schellings Mythologiebegriff in ,,Philosophie der Kunst"
Author	高橋, 秀誠(Takahashi, Hidemasa)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1986
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.48, (1986. 3) ,p.104- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00480001-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シェリング『芸術哲学』における神話論について

高橋秀誠

1

ヨーロッパの思想史上，シェリングほど生涯を通じ一貫して神話との深い関わりを見せている哲学者は他に類を見ない。1792年彼が17才の時にチュービンゲン大学に提出した学位論文『人間の悪の始元に関する創世紀第3章の最古の哲学問題解明のための批判的哲学的試論』(ラテン語) に始まり，1820年代後半から1852年にかけて彼の最晩年になされた講義『神話と啓示の哲学』に終る60年に及ぶ彼の哲学的思索は，まさに神話に始まり神話に終ったと言っても過言ではない。長い生涯の間には神話についての直接的な言及がなされない時期も存在するが，そのような時においても根底において彼の思索を規定し導いていたのは神話の問題であった。

周知のようにシェリングは極めて多産家であり，(とりわけ青年期において)度々その哲学的立場を変更していったため，時には「プロテウス」と呼ばれて非難されている[1]。そして彼の哲学の発展の時期区分は研究者の間で様々に試みられているが，その見解は一致せず，前期と後期の決定的な境界をどこに置くかといった基本的な問題に関してすら諸説紛糾している状態であるが[2]，彼の神話論に関してはアルヴォーンの行った次のような三段階の区分が一般に認められている[3]。

1. 初期の，神話を歴史的合理主義的に解釈した時期。
   著作としては，上記の学位論文と，翌1793年の『最古の世界の神話，史的伝説，および哲学説について』の二つがある。

2. 中期の，神話が美的立場から把握された時期。

この時期における彼の神話論を最もまとまった形で展開しているのは，1802 / 03 年にイェナで，そして 1803 / 04 年にヴュルツブルクで繰り返して行われた『芸術哲学』講義である。また，この前後の時期 (1800～04 年) に発表された著作と講義においても神話についての重要な論及が見られる。

3. 1841～52 年の晩年から最晩年にかけてベルリンにおいて行われた講義『神話と啓示の哲学』――これはヘーゲルの「消極哲学」を超克することをめざした「積極哲学」の壮大な体系であるが――において見られる「神話の宗教的把握」がなされた時期[4]。

本稿は，上の 3 つの時期のうちの第 2 番目の時期におけるシェリングの神話論を考察の対象とするものであるが，本論に入る前に初期の神話論について簡単に触れておきたい。

前記の学位論文はシェリングがチュービン大学哲学部 2 年次を終了し，2 年間の神学部に入学する前の 1792 年 9 月に提出され印刷された彼の学問上の処女作である。この中でシェリングは創世紀第 3 章のアダムとイブの堕罪，楽園追放の神話を取り上げ，これを他の古代神話，とりわけギリシア神話のプロメテウス，パンドラの神話と比較し，またプラトンが『ポリティコス』において述べている叡知的世界からの追放の寓話とも比較している。そしてこの黄金時代の喪失を，すべての道徳的，自然的災厄の起源であるとする一方で，人間が必然性から自由へと移行した出来事として歓迎し，かくして人類の発展史における原罪の積極的意味を認めているのである。また既にこの処女作の中で，蛇やケルビムといった神話的形象の象徴的解釈が試みられている事は，後の神話論へつながるものとして注目されて良い。(I 23)

この学位論文に続くシェリングの二番目の著作は，1793 年にイェーナ大学の東洋学の教授 H. E. G. パウルスの編集する雑誌『メモラビリエン』に発表された『最古の世界の神話，史的伝説，および哲学説について』であるが，ここではシェリングは学位論文の見解を発展させ，神話概念をより包括的に規定する事をめざしている。この 2 つの論文には，神話学の分野

では C. G. ハイネ，J. G. アイヒホルン，そしてヘルダーが，哲学方面ではカント，ライプニッツ，レッシング，メンデルスゾーン等の著作が引証されており，これらの，当時のドイツ思想界の頂点とも言える諸説を咀嚼し受容している水準の高さは，それが17才の少年によって書かれたものとはとても信じ難い程であり，彼の早熟をよく示している。しかし全体として見た時，独創性はそれ程見られぬとも言われ，とりわけ聖書学プロパーの見地からは，「原理的にも方法的にもアイヒホルン学派の見解から出ていない」[5] とも評されている。この二著は出版された当時においては比較的好意的に学界に受け入れられたようであるが，すぐ後に続くシュリングの，まずフィヒテ哲学の独創的祖述者としての，次に自然哲学の主唱者としての華々しい活躍の影に隠れてしまった事もあり，影響と言える程のものは残さずに，すぐに忘れ去られてしまったようである[6]。またほとんどのシェリング研究書も，その叙述の発端を，1794年のフィヒテ哲学を祖述した『哲学一般の形式の可能性について』に置いており[7]，さらに，シェリング哲学が独自に形成されたのは1797年の『自然哲学の理念』以降であるとして，この初期の神話論が論及される事は極めて稀である。しかしながらこの二著は当時の神話学，哲学，歴史学等の成果の精髄を吸収しており，単にシェリングの思惟の出発点を示しているというだけでなく，1790年代後半から1800年前後に頂点を迎えるロマン派の神話論の成立する前史のドキュメントとしても極めて興味深いものである。すなわちこの二つの著作からは，初期ロマン派の神話論が如何にハイネやヘルダー等の啓蒙主義時代の思想家の神話論を受容して生れたのか，その成立史の一齣を窺うことが可能であり，それゆえゲーテ時代の神話論の成立を歴史的に論究しようとする者の避けて通る事のできない文献であると言えよう。

上記の1792 / 93年の二論文以降，1790年代終り迄の時期——この時期は毎年休みなく単行本・雑誌論文が公表されているシェリングの最も多産な時期であるが——には，神話についての論述はごく僅かしか見られず，その内容も初期の神話論の枠から出ていないものが多い。唯一の重大な例外は，所謂『ドイツ観念論最古の体系計画』(1796 / 97年) であるが，本

稿では幾つかの理由からこの文書には触れない事にする[8]。再び神話が主題的に論じられるようになるのは1800年の『超越論的観念論の体系』以後であるが，これは1790年代末における初期ロマン派，とりわけシュレーゲル兄弟との交流が大きな刺激となったように思われる。この時期(1800～04年)の神話論を最も体系的に展開しているのは，『芸術哲学』講義の第1部第2章「芸術の素材の構成」(V 388～457)である。以下本論では，この講義で論じられている神話をめぐる諸問題の中から「近代文芸と神話」の問題を主として取り上げ，特に「個別的神話 (partielle Mythologie)」の概念と，ロマン派の提唱した「新しい神話」に対するシュリングの態度について論究して行きたい。

2

『芸術哲学』における神話論の，初期の二論文のそれとの根本的な相違は，後者が神話を飽く迄も人類の発展段階の初期＝幼年期の歴史的形成物と考えるのに対し，前者は神話概念を超歴史的，普遍的なものへと拡張し，芸術一般が必要とする素材の体系と解した点にある。歴史的に見た時，この拡張を可能ならしめたのはヘルダーにおいて準備され，ゲーテの影響下に「神話を詩的絶対性において叙述」(V 412) する事を試みたK. Ph. モーリッツの神話論[9]の存在に負う所が大きいが，シェリングの功績はこの芸術素材論を当時の彼の立場である同一哲学，とりわけその新プラトン主義[10]によって緻密に基礎づけた点にあるといえよう。この芸術素材論を彼は『芸術哲学』と同時期に行われた別の講義[11]の中で次のように要約している。「芸術はそれ自体，単に要素的 (elementarisch) で生のまま (roh) である事を止め，それ自身既に有機的 (organisch) であるような素材を必要とする」。(VI 571) このような有機的に分節化された素材＝象徴の体系をこの時期のシェリングは「神話 (Mythologie)」と呼ぶのである。このような象徴＝理念 (Idee) の体系を芸術作品はその基底として欠く事ができないのである。ギリシアにおいては芸術家は，神話を芸術創造に先立って既に所有していたのであり，自由に素材をそこから持ってく

る事が可能であったが，近代世界はギリシアにおいて存在していたような「普遍的象徴体系 (die allgemeine Symbolik)」である「真の神話」を欠いている。(V 441, VI 571, usw.) それゆえ近代の芸術家は「各自がひとつの神話，即ちポエジーの完結した世界 (einen abgeschlossenen Kreis der Poesie) を創出」(V 444) せねばならないとシュリングは言う。このように近代の芸術家は創作するにあたり，その基底自体を各自が創り出さねばならないのであり，この点に近代の芸術家の直面する困難があり，彼等の作品が，古代芸術のような統一的全体を形造る事ができず，また調和的発展をも望み得ない根本的原因がある。まさに Fr. シュレーゲルが『神話についての講演』(以下『神話講演』と略す) の中で「近代文芸が古代文芸に遅れをとっているすべての本質的要素は次の言葉に総括し得る。我々は神話を所有していない，と」[12] と述べる所以である。ルカーチもまた『小説の理論』(1916 年) において古代叙事詩と近代の小説を対比するにあたり，前者では「統一」は予め先験的に与えられているのに対し，後者では「統一」は実現すべく課せられており，作品を通して現実化されねばならない，と近代の芸術家の困難を鋭く規定している。

シェリングは，普遍的神話を持たない近代の「すべての偉大な詩人は，この未だ生成 (Werden) の内に捉えられる (神話的) 世界のうちの——彼の時代はその世界のうちのただ一部分のみを啓示する事ができるのであるが——この世界のうちの彼に啓示された部分をひとつの全体へと形成し，この素材から彼の神話を形成する事が義務づけられている」(V 445) と述べている。そして近代において，そのそれぞれの生きた時代を素材として，卓越した仕方で「個有の神話的世界」(V 445) を形成した詩人としてシェリングは，ダンテ，シェイクスピア，セルヴァンテス，ゲーテの 4 人を挙げている。彼は特にゲーテの『ファウスト』[13] を「真正の神話的詩篇」と呼び，「現代の最も深い，最も純粋なる精髄」であると最高の讃辞を送っている。(VI 572)

しかしシェリングは『芸術哲学』において，近代における「個別的神話 (partielle Mythologie)」(VI 572, VI 67) という個人によって形成された

神話についてだけではなく，将来における「普遍的神話」の到来についても語っている。次章では彼の言う「普遍的神話」とロマン派の「新しい神話」との関係を考察して行きたい。

3

シェリングは『芸術哲学』42節の終りに近い箇所で，自然哲学と「新しい神話」との関係について論究している。この部分はロマン派の提唱した「新しい神話」に対する当時のシェリングの態度を窺う事のできる極めて重要な論述を含んでおり，それゆえ以下において少し詳しく検討して行きたい。シェリングは次のように始める。

「自然学から——勿論それは思弁的自然学である限りにおいてであるが——新しい神話の素材を得る事がおそらく可能であろう，という着想を近頃しばしば耳にする。これについては次の事が言われねばならない」。(V 446)

シェリングはここで，このような主張を行っている者の名前を一切挙げていないが，これは明らかに1790年代後半にロマン派を中心として高まっていた「新しい神話」形成の気運を指しているものである。このような動向を代弁しているのが Fr. シュレーゲルの『神話講演』(1800年) であり，彼はその中で「新しい神話」[14] の源泉たりうるものとして「観念論」と，最近革新しつつある「自然学」(Physik) の二つを挙げている[15]。

それでは「自然哲学」[16] と「神話」とは一体どのように結びつくのだろうか。それを知るにはやはり，両者の誕生の地であるギリシアにさかのぼらねばならない。ギリシア哲学の黎明期に既に，ホメーロスの歌った神々は，自然現象のアレゴリーであるとする，神話の寓意的解釈が起った。神話の神々に対してこのような解釈を行った最初の人物として知られているのは紀元前6世紀後半のレギオン出身のテアゲネスである。彼は「イリアス」20巻に描かれている神々の，トロイア側とギリシア側に別れての闘争は，自然における乾と湿，暖と冷，光と闇，軽と重の対立相克を寓意的に表現したものである，と解した。また彼はさらに神々を倫理的観念のア

レゴリーと考え，アテネをフロネーシス(思慮)，アレスをアフロジュネー(無思慮)，アフロディテをエピテュミア(欲望)と解釈したと伝えられている[17]。このような，神話の自然哲学的解釈は後にストア学派において一層体系的に展開され，そこではゼウスは天の，ヘラは大気のアレゴリーであると解釈されたのである。

シェリングも1797年の『自然哲学の理念』の中で，「はるか昔，人間精神は(それがまだ若々しく，力に満ち，神々から生れてまもない時)，世界の根源について，神話と詩において熱心に思いをめぐらした」(II 19) と，(自然)哲学が神話にその起源を持つ事を述べている。神話は，自然界の事物の生成消滅を生殖の原理で説明しており，これが自然に対する思弁の始まりであったのである。こういった背景から生れた「ギリシアの自然哲学は，物質そのものに生命を見る傾向が強く，近代的な物理学的世界観とは異なっていた」[18] のである。このような出自と性格を持っている古代の自然哲学に対し，シェリングは強い共感を抱いており，彼の自然哲学期の著作には，古代の自然哲学と神話との関係についての論及が幾つか見られる。その中でも特に注目されるのは『世界霊について』(1798年) の序文における言表で，そこでシェリングは「詩的表象を通して」語られている「最古の[自然]哲学へと，その哲学の発展がひと回りして完成した後に，我々の哲学はそこへと再びゆっくりと回帰している」(II 347) と述べている。これはシェリングが自らの自然哲学を，ある一面では，古代の有機的自然観の再興であると考えている事を示している。

18世紀後半には自然科学上の新しい発見が相次いで起り，例えばガルヴァーニの動物電気の発見，ヴォルタによる電池の発明，あるいは化学の領域におけるラヴォアジェとプリーストリイによる燃焼過程の研究等は，自然科学の根本的改造を促したのであるが，これらはシェリングを含めたロマン派の自然観にも多大の影響を与える事になる[19]。シェリングは，これらの自然科学上の新知見を摂取し，一方でスピノザ——歴史的なスピノザというより，レッシング，ヘルダー，ゲーテといった者達の解釈を通してみられたスピノザである——に基づき，彼の自然哲学において，近代に

おいて優勢であった従来の機械論にかわる，自然の生命的・有機的な見方を大胆に展開したのである。「自然は可視的精神であり，精神は不可視の自然である」(II 56) という有名な命題は，彼の自然哲学の根底にある理念，すなわち自然と精神の同一性を簡潔に表現したものである。

シェリングの自然哲学は登場するや否や，大きな成功を収め，多くの信奉者を獲得したが，特にロマン派の詩人達には多大な影響を与えた[20]。シュレーゲルが『神話講演』の中ではシェリングの名を挙げていないとしても，「新しい神話」の源泉としての「自然学」という理念は，シェリングの刺激なしに成立したとは考えにくい。とはいえ自然哲学の領域でもシュレーゲルはシェリングの忠実な弟子であったわけではない。H. アイヒナーは，むしろノヴァーリスの自然哲学からの影響をより重視している[21]。ノヴァーリスは1798年7月のシュレーゲル宛ての書簡の中で，「自然学を最も一般的な意味で，純粋に象徴的に取り扱うのが正しい方法ではなかろうか」[22] と言っており，確かにこの主張はシュレーゲルが『神話講演』の中で，最近の自然学は「自然の神話的見方」[23] に迄あと一歩の所まで近づいている，と述べているのと符合している。シェリングも，「自然の象徴的見方の再生は，それゆえ真の神話の再生への第一歩となろう」(VI 572) と語っており，新しい自然学が象徴言語＝神話の再生の徴であるというのは，初期ロマン派の人々に共通する確信であり，期待であったのである。

しかし，少し前にはシェリング自身がそれを積極的に支持していたかに見える，ロマン派の詩人達が共通に抱いていた上述の着想に対して，シェリングは次のように批判を加える。「近代文芸の基本法則は独創性である(古代芸術においてはこうしたものは全く思いもつかぬものであった)。すべての創造的な個人は，自分自身で自らの神話を創り出さねばならない」。(V 446) すなわち「この神話は飽く迄も創造されるのであって，一定の哲学の理念を手引きとして作成されるものであってはならない」。(ibid.) もし芸術作品が後者の仕方で製作された場合には，その作品は「独立した詩的生命」を持つことは出来ないのである。そしてシェリングはこのような，自然哲学の理念を「利用する」という誤りに陥った者の例として，イギリ

スの詩人であり自然研究者である E. ダーウィン[24]の名を挙げている。(V 447) そして最後にシェリングは次のように決論づけている。

「それゆえ歴史が我々に普遍妥当的形式としての神話を再び与える迄は，個人が各々，自分の詩的世界 (seinen poetischen Kreis) を創り出さねばならない状態が続くであろう。そして近代人の一般的エレメントは独創性であるから，まさに独創的であればある程，普遍的となるという法則が支配するであろう」。(ibid.) 「どんな素材であれ独創的に取り扱われた素材は，そのように取り扱われたという事によって普遍的に詩的なものにもなるのである。高等自然学 (die höhere Physik) の素材を，独創的な仕方で用いる事が可能な者にとっては，その素材は真に詩的なものに，普遍的に詩的なものになるのである」。(ibid.)

すなわち，「自然の象徴的，神話的見方」の朋芽を含んでいる「思弁的自然学」の素材を用いて詩作したとしても，現在の段階でそれが直ちに「普遍的神話」の形成へとつながる事はなく，それは飽く迄も「個別的神話」にとどまるのである。要するに，近代の詩人が普遍性をめざすには，より普遍的な素材を選び出すことよりも，どんな素材にせよ，その素材を独創的に取り扱う事が肝要である，とシェリングはここで述べているのである。このようにシェリングは，自然哲学から直ちに「普遍的象徴体系」としての「新しい神話」を導出しようとする試みは不可能であると断じているのであるが，しかし彼はここで「新しい神話」の可能性を完全に否定しているのではない。彼は以上の否定論に続く箇所では，むしろ逆にロマン派の「新しい神話論」を別の面から基礎づけているとも取り得るような論述を展開している。

4

結論を先取りして言うならば，シェリングは「高等思弁的自然学の中に，将来の神話と象徴体系の可能性を求める事が可能である」(V 449) と主張するのである。彼にとって「新しい自然哲学」の出現は，単なる一学科の革新にとどまらず，極めて重大な歴史的意味を持つのである。「キリ

スト教に[換言すれば「近代」にとって]固有な方向は有限者から無限者[へ向かう方向]である」。(V 447) 近代は，古代において存在したような客観的な「普遍的象徴体系を欠いているため」，有限者において無限者を直観しようとする「一種の象徴的[なものを求める]努力」は「神秘主義」という主観的な形式においてのみ可能であった。(ibid.) 神秘主義は，このようにキリスト教内部における，その反対の方向をめざす所の例外的な運動であった。「しかしながらキリスト教は今や既に時の経過により，そして世界精神の働きによって(世界精神は，そのひそやかな意図を最初はただ予感させるだけではあるが，とはいえ決して見誤らせる事もないのである)，単に移行として，単に要素として，そこで近代の継起が最後に総体性として自らを提示する，いわば近代世界の一面として示されるのである」。(V 448) すなわちシェリングは「世界精神が，そのめざしている偉大な詩を完成させ」(V 445) ようとする時が近づいているという。その最初の徴候が，「普遍妥当的・学問的客観的な方式での，有限者における無限者の直観」(V 447) である「自然哲学」の出現なのである。

さらにシェリングは「将来の普遍的神話」の再生へと至る過程を，ギリシアにおける「普遍的神話」の成立と対比して次のように言う。「ギリシアの神々はその根源から言うと自然存在 (Naturwesen) であった。この自然の神々は真に自立的で詩的な存在になるため，その根源から離れて歴史的存在にならねばならなかった」。(V 448) ギリシアの神々は本来自然神でありながら，歴史の領域へと現出し，歴史過程に影響を及ぼしたのであった。(例えば『イリアス』を見よ) それに対し「近代的形成 (Bildung) は宇宙を歴史と見，道徳的王国として見るのであり，その限りにおいて自らを[ギリシアに対する]対立として提示する」。「その[近代の]神々は歴史的な神々である。これらの神々は，自然にその場所を得，すなわち自然の神々となる前には，真に神々となる事はできず，生命に満ち，自立的で，詩的な存在になる事はできない」。(V 448f.) そして次のようにシェリングは結論する。「ギリシア人が彼等の実在論的な神々 (ihre realistischen [Gottheiten]) を歴史に根づかせたように，[近代人は]観念論的な神々

(ihre idealistischen Gottheiten) を自然へと根づかせなくてはならない。私にはこれがすべての近代文芸の究極的使命であるように思われる」。(V 449, cf. VI 67, V 457)

ここでシェリングが「近代文芸の究極的使命」と呼んでいるもの，これはまさに，シェリングのかっての盟友ヘルダーリンが後期作品において苦闘しつつめざしていたものと極めて近いものではないだろうか。丁度シェリングがイェナで『芸術哲学』を講じていたのと同じ頃，ヘルダーリンは後期讃歌の頂点的作品である『平和の祝い』を完成させた。この詩の8, 9節で彼は，歴史の領域へと退き身を隠した神々が，将来の祝祭の日に，民族の合唱の中で再び自然において現出するという終末論的ヴィジョンを大胆に歌いあげているが，これは上でシェリングが述べている近代文芸の究極的使命を，歴史を先取りしつつ詩的形象化したものと見る事はできないであろうか。「新しい神話」の形成における難問，すなわち「個の神話」が「類の神話」(V 414 ff.) へと変容するのは如何にして可能であるか，という問題に対しても，ヘルダーリンは長年の労苦を経て1800年前後には，彼なりの答を見出した。彼は後期讃歌のうちで最も早く成立した『母なる大地に』[26] と『ドナウの源泉にて』[27] において，自らの詩作を将来の民族の合唱の前奏 (Vorspiel) であると規定し，又，詩作は神に強いられ (heiliggenötigt), 神に需用 (brauchen・・・『ライン川』114行[28]) されて行う業であると，ギリシア人が抱いていた，詩の神的起源説を復活させる。その他にもヘルダーリンの後期作品の中には，シェリングの神話論に光を投げかける思想を多く含んでいるように思われるが，ここではこれ以上論究する事なく本題に戻りたい。

将来において「普遍的神話」が再来し，それの中へと「中間時 (Zwischenzeit)」の「個別的神話」が吸収され，止揚されるというシェリングの信念は，その背景にある当時の彼の歴史観，歴史哲学との関連において一層理解され得るものとなる。シェリングは1802年の講義『大学における学問研究の方法について』の中で次のように言う。

「...キリスト教はその最も内面的な精神から言って，また最高の意味

において歴史的なのである。時の個々の各瞬間は神の個々の面の啓示であり，その面の各々において神は絶対である」。(V 288) 同様の思想は既に『超越論的観念論の体系』で次のように述べられている。「全体としての歴史は絶対者の絶えざる，次第に自らを露顕 (enthüllen) して行く啓示である。・・・中略・・・人間はその歴史によって神の現存在の証明を行っていくが，その証明は全歴史を通してのみ完遂されるようなものなのである」。(III 603)

このように，歴史の進行を神の啓示の展開とみる歴史観は，ドイツ観念論の中ではシェリングによって始めて明確に打ち出され，後にヘーゲルによって，とりわけ彼の『歴史哲学』と『哲学史』において大規模に，より整合的に展開されるに至るものであるが，「個別的神話」が将来「普遍的神話」へと統合される，というシェリングの展望も，この歴史観に沿って考えられているのである。すなわち，世界史の各段階がそれぞれ神に接しているが故に，その時々にその時代を素材として形成された「個別的神話」も神の啓示の一面を表出しており，それらの成果は将来の「普遍的象徴体系＝真の神話」の復興・再生に際してその中へと統合さるべき必須の契機なのである (cf. V 445) この世界史の終結点においてなされる統合，これを行うのが将来の「純粋なホメーロス」[29] (V 449) であるとシェリングは予言する。そこではギリシアのホメーロスが「自然の神々を歴史の神神へと形成した」――シェリングはこれを「自然を歴史と統一した」とも言っている――のとは反対に，「歴史の神々を自然の神々へと形成する」すなわち「歴史を自然と統一する事」が将来のホメーロスに課せられた課題なのである。(V 457) しかしながら，このような「普遍的神話」の到来する時期に関してはシェリングは「歴史の継起が同時へと転ずる歴史的時点は，なお不確定の遠く隔たった先に存するように思われる」(V 449) と言い，現在は各々の詩人が，それぞれ個性的な仕方で様々の素材から「各人の神話的世界」を形成する他はない時代であり，この時代の詩人はこのような間接的な仕方によってのみ，将来の「普遍的神話」の形成に参与する事が可能なのであって，直接的に「普遍的神話」を創出する事は不可能

であると断定している。

最後に，以上見てきた「新しい神話」に対するシェリングの両義的態度をもう一度要約しておこう。

1. 基本的にはわれわれはまだ将来の総合に先立つアンチテーゼの時代(＝キリスト教に代表される世界史的時代)，すなわち人間が個的に分断された時代に生きている。(cf. V 116～120)
2. しかし将来の「普遍的神話」の再生の徴は既に存在している。その徴とは「自然の象徴的見方(有限者において無限者を見る)」の再興である「自然哲学」である。
3. だがそれはひそかな徴にすぎず，「普遍的神話」の再来は，今はまだ何時ともいえぬ不確定の遠い将来の出来事である。

シェリングは Fr. シュレーゲルが『神話講演』において述べている「新しい神話」の待望を一面では認めており，とりわけ「自然哲学」と「新しい神話」の関係についてはシュレーゲルには見られぬような注目すべき歴史哲学的な根拠づけを行っている事をわれわれは『芸術哲学』の所論を追跡する事によって確認した。しかしこの当時の二人の神話論の決定的差異は，シェリングが「普遍的神話」の到来する時期を，無期限の将来へと繰り延べした所にある。その理由としてひとつにはこの講義が行われた時期(1803 / 04 年)には 1799 年頃にロマン派の人々を支配していた終末論的熱狂が既に醒めてしまったという歴史的背景が考えられ，他方ではシェリングが「普遍的神話」を考える時，飽く迄も「類による神話」(V 414) という視点を堅持したために，個人による「普遍的神話」の形成という Fr. シュレーゲル，ノヴァーリスの「新しい神話論」を最終的には否認せざるを得なかった，という点が考えられる。彼等の「新しい神話論」をさらに詳細に検討しシェリングの神話論との厳密な対比を行う事は，筆者の将来の課題であるが，初期ロマン派の神話論を全体として考察するにあたって，歴史的にも一番最後に成立したシェリングの『芸術哲学』の神話論がひとつの座標軸たりうるという事は，以上の論述によっても明らかになったことと思われる。

注

シェリング全集は Schellings Werke. Hrsg. v. M. Schröter. 3 Aufl. 1977-79. を使用したが，引用に際しては慣例に倣い，上記の全集の原本である K.F.A. Schelling 編の全集 (1856-61) の巻数・頁数によって表記した。ローマ数字は巻数を，アラビア数字は頁数を示す。例えば III 629 とあるのは同全集第3巻629頁の事である。なお引用文中で［ ］で囲まれた部分は引用者による意味の説明・補足である。

1) H. Holz, Perspektive Natur. S. 59. in: Hrsg. v. H. M. Baumgartner, Schelling. Stuttgart 1975.
2) H. J. Sandkühler, Friedrich Joseph Schelling. Stuttgart 1970. S. 83 f.
3) A. Allwohn, Der Mythos bei Schelling. Charlottenburg 1927. (Kant=Studien Ergänzungsheft 61.)
   A. Horstmann, Der Mythosbegriff vom frühen Christentum bis zur Gegenwart. S. 37 f. In: Archiv für Begriffsgeschichte. 1979.
4) 既に1820年代の末にはミュンヘンにおいて『神話の哲学』の原形が講義されている。
5) Chr. Hartlich / W. Sachs, Der Ursprung des Mythosbegriffes in der modernen Bibelwissenschaft. Tübingen 1952. S. 56-58. zit. Hrsg. v. H. M. Baumgartner, Schelling. Freiburg / München 1975. S. 188
6) W. J. Jacobs, Editorischer Bericht in: F.W.J. Schelling Werke Bd.1. hrsg. v. W. J. Jacobs u.a. Stuttgart 1976. S. 189-191.
7) 例えば K. Fischer, Schelling Leben, Werke und Lehre. Geschichte der neuern Philosophie. 7. Bd. Heidelberg 1923.
8) 1965年に O. ペゲラーによってヘーゲル執筆者説が提起された以降においては，かつてのようにシェリング執筆説を素朴に前提とする事は許されず，この文書を論じるにはある程度の文献学的操作が必須であり，又，著者問題以外にも極めて多くの問題を含んでいるため，本稿ではこの断片は論述の対象から一切除外した。なおこの『体系計画』をめぐる論争史に関しては次著を参照。Hrsg. v. Chr. Jamme / H. Schneider, Mythologie der Vernunft. Frankfurt / M. 1984. (巻末に詳しい文献目録がある)
9) K. Ph. Moritz, Götterlehre oder Mythologische Dichtungen der Alten. Berlin 1791. (1. Aufl.)
10) シェリングの同一哲学における新プラトン主義の問題を論じたものとしては，W. Beierwaltes, Platonismus und Idealismus. Frankfurt / M. 1972. があり，同じ著者の Identität und Differenz. Franfurt / M. 1980. にも『ブルーノ』の研究が含まれている。

11) 『全哲学及びとりわけ自然哲学の体系』(1804年)

12) Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe. Bd. 2. hrsg. v. H. Eichner. München 1967. S. 312. (以下 KFA. と略す)

13) シェリングは1790年に出版された断片から判断している。

14) Fr. シュレーゲルの「新しい神話」概念に関しては E. Behler の諸論文，とりわけ Friedrich Schlegels ‚Rede über die Mythologie' im Hinblick auf Nietzsche. In: Nietzsche-Studien. Bd. 8. 1979. を参照。

15) KFA. Bd. 2. S. 314 f. S. 323.

16) 「思弁的自然学」,「高等自然学」,「自然哲学」はほとんど同義で使われている。

17) R. Pfeiffer, Geschichte der Klassischen Philologie. 2. Aufl. München 1978. S. 26.

なおホメーロスの寓意的解釈の歴史については E. R. Curtius, Europäische Literatur und Lateinisches Mittelalter. 2. Aufl. Bern 1954. S. 210 ff. を参照。

18) 藤縄謙三『ギリシア神話の世界観』新潮社 1971 28ページ。

19) O. Walzel, Deutsche Romantik. 5. Aufl. Bd. 1. Leibzig 1923. S. 46 f.

20) R. Haym, Die Romantische Schule. Berlin. 1870. Reprint. 1977. S. 610 ff.

21) KFA. Bd. 2. S. XCII.

22) Novalis Schriften. Bd. 4. hrsg. v. R. Samuel. Stuttgart 1975. S. 255.

23) KFA. Bd. 2. S. 315.

24) Erasmus Darwin (1731-1802) のこと。イギリスの医者，自然研究者，詩人。進化論で有名な Charles Darwin の祖父である。リンネの植物体系をポープの詩風で歌った教訓詩 The Botanic Garden が代表作。彼の作品の幾つかは直ちに独訳されている。(cf. L. Brandl, Erasmus Darwins Botanic Garden. Wien 1909. Reprint 1964.)

25) F. Hölderlin, Große Stuttgarter Ausgabe. Stuttgart 1957. Bd. 3. S. 531 ff. F. Beißner はこの作品の成立を1802年秋頃と推定している。(*Ibid.* S. 539)

26) *Ibid.*, Bd. 2. S. 123 ff.

27) *Ibid.*, S. 126 ff.

28) *Ibid.*, S. 145.

29) シェリングは Homeros という語の語源解釈を行い，それを「統一する者 (der Einigende)」,「同一性 (die Identität)」の意味に解している。(V 457)